

# 朝鮮学校の今日の課題

申 京 和

## ◇ 朝鮮学校の歴史と現在

日本の朝鮮侵略と植民地化により、一九一〇年から一九四五年の三十六年間、朝鮮半島からの資源や農作物の略奪、土地家屋の没収、朝鮮語禁止をはじめとする朝鮮文化抹殺、皇国臣民化政策などが行われ、塗炭の生活を強いられることになった。朝鮮の人々は、日本各地に流入することとなった。侵略拡大と推進のための軍需工場、飛行場、基地、港湾建設や炭鉱採掘、ダム工事、線路敷設、日本軍の性奴隷となった朝鮮女性など、多くは強制連行され、強制労働などで奴隷同様の生活を強いられた人たちであった。また、国家総動員令により徴兵された朝鮮の青年たちは、南方の戦場で多くが戦死した。広島、長崎に投下された原子爆弾により、三万〜四万の朝鮮の人々が命を奪われた。

日本の敗戦後、日本には約二五〇万人の朝鮮半島出身者が住んでいたが、朝鮮南半部のアメリカ占領軍の軍政統治や弾圧による、朝鮮の南北分断の固定化や、やむを得ない事情で故郷に帰ることができなかつた七〇万人とその子弟たちが日本に

居住することになった。奪われた母の言葉や文字、文化や歴史を子どもたちに教えるために日本各地に五〇〇余りの「国語講習所」が建てられ、民族教育が行われた。これが朝鮮学校の始まりである。

しかし、日本占領アメリカ軍とGHQは、兵庫、大阪、東京などの朝鮮学校の運営を阻み、教育の権利を要求する教師、児童生徒らを、「非常戒厳令」(占領軍で一度のみ)を公布し、警察隊を動員し、激しく弾圧した。そして、一九四九年一〇月九日には「朝鮮学校閉鎖令」を出し、すべての朝鮮学校を閉鎖した。

一九六〇年代、日本各地に幼、小、中、高、大学計一六〇余校が建てられ、日本政府からの制度上の差別の中でも自主運営された。現在では六〇余校が民族の心を子どもたちとともに培っている。

北海道では、敗戦後、一三万〜一五万人の朝鮮の人たちが住んでおり、「札幌朝鮮連盟初等学院」(現在の北海道朝鮮学校の前身)も強制閉鎖されてしまう。その後、札幌、函館、稚内、十勝、釧路、室蘭など一一カ所で、日本学校に通いながら、夜間に朝鮮語を学ぶ「午後夜間学校」が運営されたほか、千歳にも朝鮮人初等学校が建てられた。

一九六一年、そのすべてを統合し、北海道朝鮮初中級学校が開校され、札幌市白石区南郷に木造校舎が建てられた(生徒数約五〇〇名)。一九七一年には清田区平岡へと移転、一九八二年には高級部(高等学校)が併設され、現在の北海道朝鮮初中高級学校となった。北海道朝鮮学校は今年まで五八年の歴史を刻んでいる。

朝鮮学校のカリキュラムは、朝鮮語、朝鮮史、地理、音楽をはじめとする民族科目と、日本語、英語、数学、理科、社会、日本史、世界史は、日本の学校と同じく授業に組み入れ、民族の言葉と文化を学びながらも、日本で暮らしていくための教養と知識を兼ね備えた人材育成を行っている。サッカー、ラグビー、陸上、朝鮮舞踊、吹奏楽などでも大きな成果を挙げている。

生徒はほとんどが在日三世、四世、五世であり、民族のアイデンティティ(正体性)を育んだ卒業生は、在日社会を形成する軸としての役割を果たしながらも、日本社会にも大きく貢献する社会人として多方面でその力を発揮している。

## ◇ 続く朝鮮学校への差別

しかしながら、日本政府は朝鮮学校を各種学校(自動車学校、専門学校など)としか扱わず、国庫からの助成や補助は一切支給されない。ひつ迫した財政状況ながらも朝鮮同胞の相互扶助の精神で運営は行われている(札幌市、北海道は交流費、教材費を一部支給)。

二〇一〇年四月からの高校無償化（高校就学支援金）は、インターナショナルスクールや中華学校など他の外国人学校は認めたものの、朝鮮学校については、朝鮮民主主義人民共和国や朝鮮総連との関わり、拉致問題の進展がないことなどの政治的意図をあらさまに除外した。高校無償化については、国連・人種差別撤廃委員会などの度重なる勧告を再三無視し続けたばかりか、二〇一二年一月二六日に安倍政権が発足すると、わずか二日後の二八日に省令改正手続きに着手し、朝鮮学校を不指定とした。外国人学校で唯一除外された全国一〇校の朝鮮高校のうち五校が、訴訟で日本政府を相手取り裁判闘争を繰り広げている。

また、二〇一六年三月二九日文科省の「朝鮮学校に係る補助金交付に関する留意点について」という前例を見ない狡猾な通知により、わずかばかりの補助金さえも停止させられた各地の朝鮮学校の運営は、いっそう厳しいものとなっている。

二〇〇九年の京都朝鮮第一初級学校襲撃事件、二〇一〇年の徳島教組襲撃事件など、在特会（現・日本第一党）による卑劣な活動や過激なヘイトスピーチは、札幌大通公園でも昨年行われ、「ゴミはゴミ箱へ、朝鮮人は朝鮮半島へ」と、警察に見守られながら公然と叫ばれた。

二〇一八年六月には、関西空港の税関で、修学旅行でピョンヤンから帰ってきた朝鮮学校生徒たちから、朝鮮のお土産や物品などをすべてをのこらず没収するという暴挙があった。朝鮮学校生徒にも制裁を科し、スケープゴートとして何をしても

いいのだという日本政府の無法きわまりない不当差別、人権侵害をむき出しにした。

### ◇ 広がる支援の輪

しかし、厳しい情勢の中でも、朝鮮の子どもたちと朝鮮学校を支え、支援する多くの温かい日本の方々の輪は深まっている。各地で朝鮮学校を支援する市民の会などが独自の支援活動や「無償化」裁判の支援を行っている。

札幌では、「北海道朝鮮学校を支える会」が二〇〇四年に設立され、日本学校の教員が朝鮮学校の教壇で教える「交換授業」や学習会、「無償化」除外に反対する集会や街頭宣伝も行っている。

二年に一回の朝鮮学校開放行事「アンニョンフェスタ」は、朝鮮学校オモニ会が主催する一大イベントである。このフェスタには二五〇〇人を超える日本の市民らが来校している。

韓国のキム・ミョンジュン監督が北海道朝鮮学校のドキュメンタリー映画として制作した『ウリハッキョ（私たちの学校）』は、二〇〇六年のプサン国際映画祭ドキュメンタリー部門で最優秀賞に輝き、韓国の当時の観客動員数を大きく更新し、記録を塗り替えた。この映画を通じて、七十余年もの間、日本で民族の言葉と文化を守りぬいてきた朝鮮学校の姿に深く感動した韓国の多くの人々が、自ら「モンダンヨンピル（ちび鉛筆）」と名付けた支援団体を立ち上げ、活動を行っている。朝鮮学校の紹介、『ウリハッキョ』上映会、

書籍出版に始まり、日本各地の朝鮮学校でチャリティコンサートを行い、「無償化」裁判の支援の激励に訪れるなど、その輪を広げている。

今年二月一五日から一七日まで、全国の朝鮮学校生徒児童の美術作品約五〇〇点を展示する「在日朝鮮学生美術展」が札幌市民ギャラリーで開催される。その開催には、「北海道朝鮮学校を支える会」をはじめ多くの有志たちの支えがある。展示、チラシ配布、観客動員、後援や協賛のとりつけ、ミニコンサートの準備など、成功のためにひとつのチームになって取り組んでいる。

昨年三度におよび行われた朝鮮・韓国両首脳会談による歴史的宣言、朝鮮・アメリカ史上初の首脳会談のシンガポール合意により、朝鮮半島は平和と繁栄に大きく舵がきられた。朝鮮学校はこれから日本でもっと重要な位置に置かれ、その役割は大きくなっていく。

#### 申 京和（シン ギョンファ）

一九六一年大阪桃谷に生まれる。東京小平市の朝鮮大学校文学部卒業後、一九八三年から朝鮮語（国語）教員として教壇に立つ。担任、寄宿舎舎監、教務主任、サッカー部、バスケットボール部顧問などを受ける。二〇〇六年四月から、北海道朝鮮初中高級学校の校長を務める。